



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	東日本大震災被災地におけるサービスラーニングと異文化間理解 : 仮設住宅におけるサロン活動を通じた学生たちの学び
Author(s)	齋藤, 真宏
Description	異文化間教育学会 第33回大会. 2012年6月8日(金)~6月10日(日). 立命館アジア太平洋大学(APU). 大分県別府市.
Issue Date	2012-06-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49375
Type	conference presentation
File Information	Saito_2.pdf



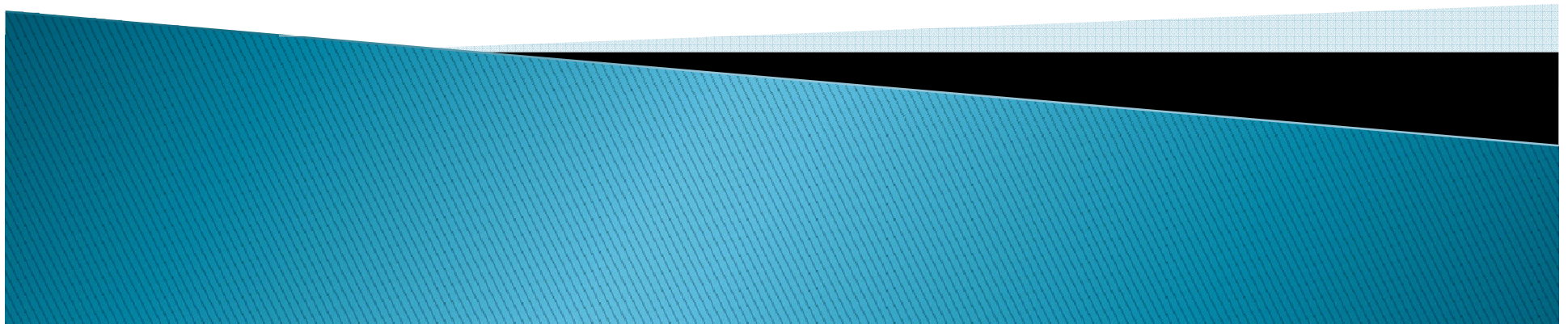
東日本大震災被災地における サービスラーニングと異文化間理解

仮設住宅におけるサロン活動を通じた学生たちの学び

旭川大学 齋藤 眞宏

Tel:0166-48-3121 (内線504)

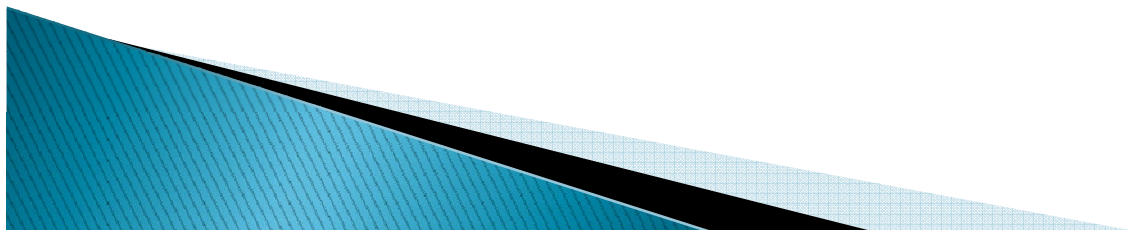
E-mail: saitoum@live.asahikawa-u.ac.jp



1. 学習とは何か

学習という言葉には非常に広く多様な定義が存在する。

- ▶ 「『学習』について問うことは、結局は『人間』について問うこと、また『学び方』を問うことは、結局は『生き方』を問うことになる」(佐伯, 2003a, p.325)
- ▶ 「学習とは『文化的実践への参加』」(佐伯, 2003b. pp.28)



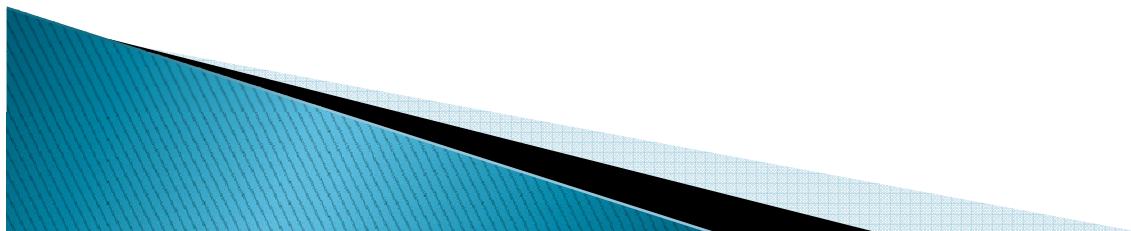
2. 学習と「文化」と「参加」

▶ 文化

絶えずものごとの根源を問い直し、修正し、その結果としてより広い社会との関係性を構築していく共同的ないとなみとその産物（佐伯, 2003b, p.30）

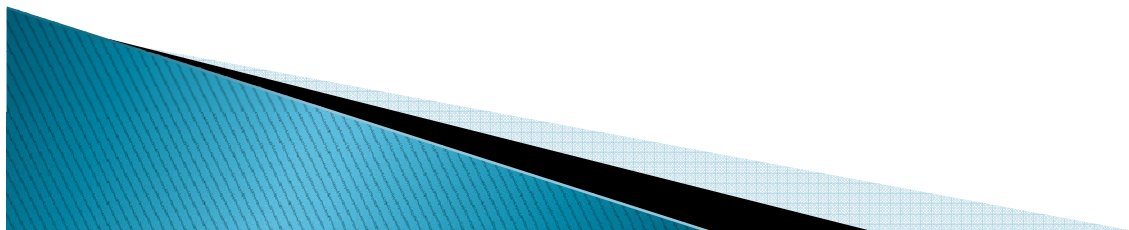
▶ 参加

「個人的な『自分探し』のいとなみでありながら、同時にきわめて社会的な、人びととの共同的ないとなみに、自らのユニークな『自分らしさ』を生かしながら、『加わっていく』いとなみ」（佐伯, 2003b, pp.30-31）



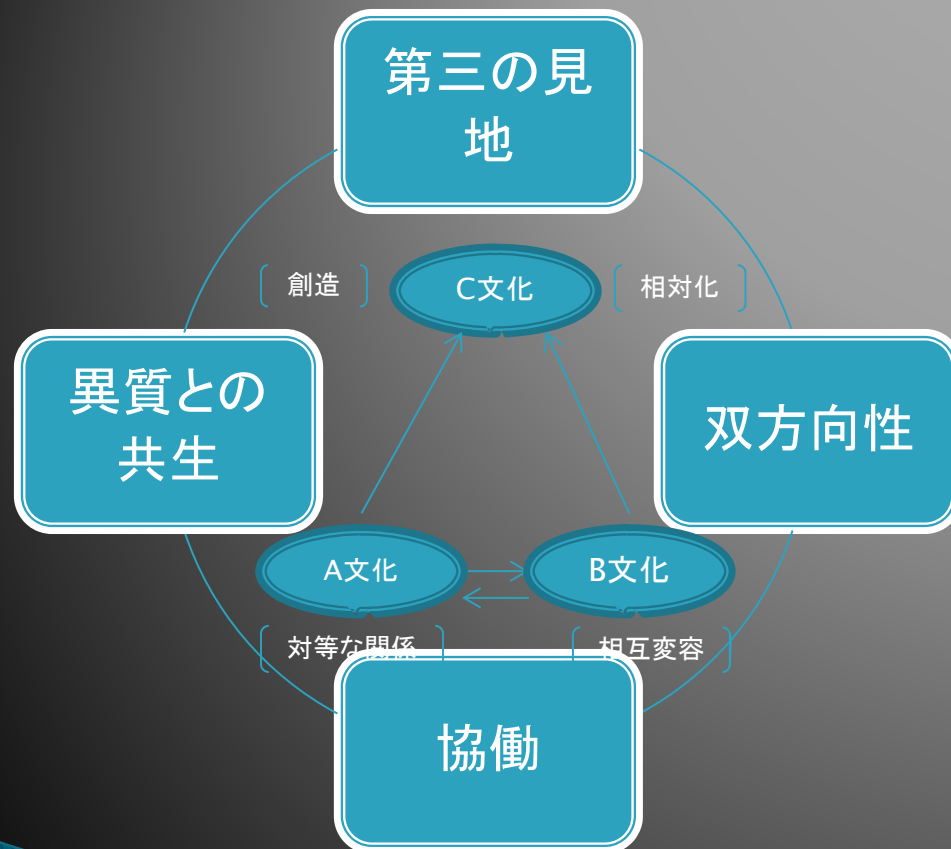
3.「文化的実践への参加」(佐伯, 1995, p.195)

- ▶「よい」とは本来どういうことなのかをさぐる。(価値の発見)
- ▶「よい」とする価値を共有する。(価値の共有)
- ▶「よい」とされるものごとをつくり出す。(価値の生産)
- ▶「よい」とされるものごとを多くのこしたり広めたりする技術を開発する。(価値の普及)



4. 異文化間教育の見取図(小島, p.8)

異文化間教育のエートス(小島、
pp.9-14)

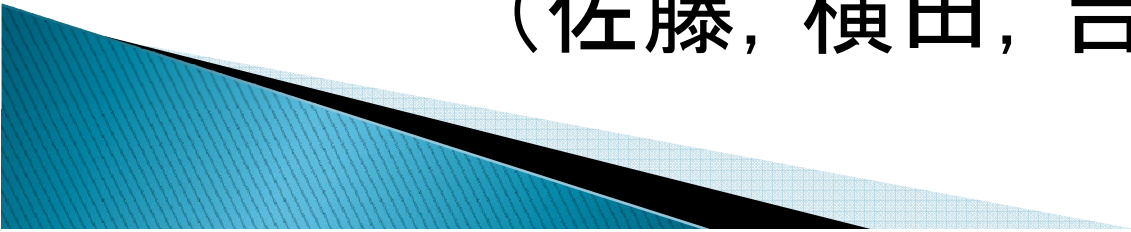


1. 二(多)元性・異質の共生
2. (異文化)間性・双方向性・相互性
3. 相対性・第3の見地・普遍性
4. 関係性・対等性・権力性
5. 相互変容性・構築性・創造性

5. 実践を志向した異文化間教育

- ① 文化間にまたがる人間，事象を取り上げる。
- ② 人間形成，人間の発達に焦点をあてる。
- ③ 複数の文化間の接触，相互作用と，その結果生じる葛藤や統合に焦点を当てる。
- ④ 関係性の組み替えを目指す。

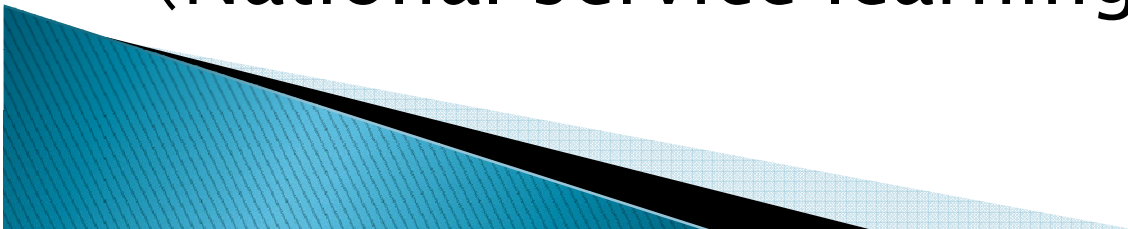
（佐藤，横田，吉谷．pp.23-24）



6. Community-based service-learningにおける学び

- ▶ 健全で、思いやり、責任感を持った個人として成長するための手段・機会の増加
- ▶ 社会の変容や問題解決に携わることを通じた自己有能感の増大
- ▶ 学びに対してより興味・関心を持つ
- ▶ 問題解決のために技能、チームで取り組む資質、計画立案能力の増大将来の職業への意識
- ▶ 責任ある市民としての態度・技能・行動

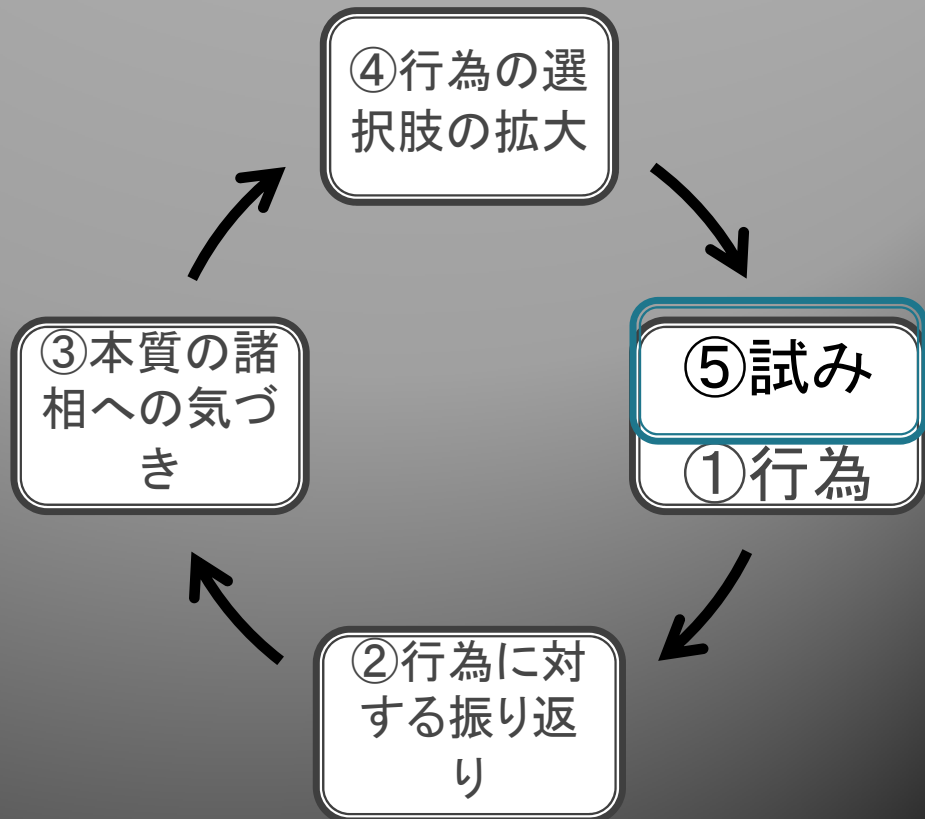
(National service learning clear house, n.d.)



7. Community based service learning と省察

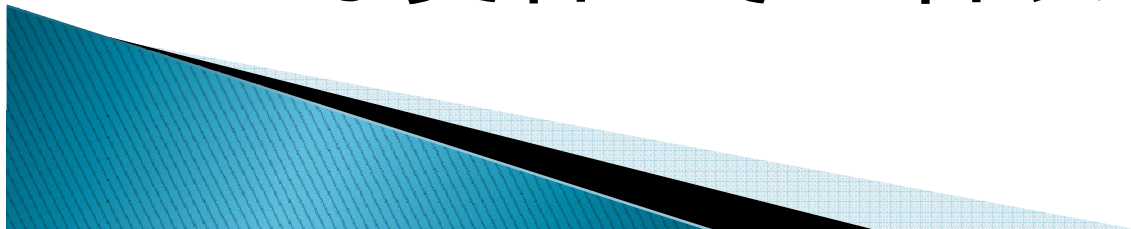
省察の過程はサービスラーニングにおける核となる要素である。構造化された省察は、学習者が行為や経験を分析するための良い機会である。それは自分の価値観や意見や考え、仮説や判断、実践の形成を可能にし、さらには学習者のより深い理解、その後の活動における意味や意義の構築につながっていく。(National service learning clear house, 2005)

ALACTモデル
(コルトハーヘン, p.54)



7. 「学び」と「異文化間教育」と「Community-based service-learning」の親和性

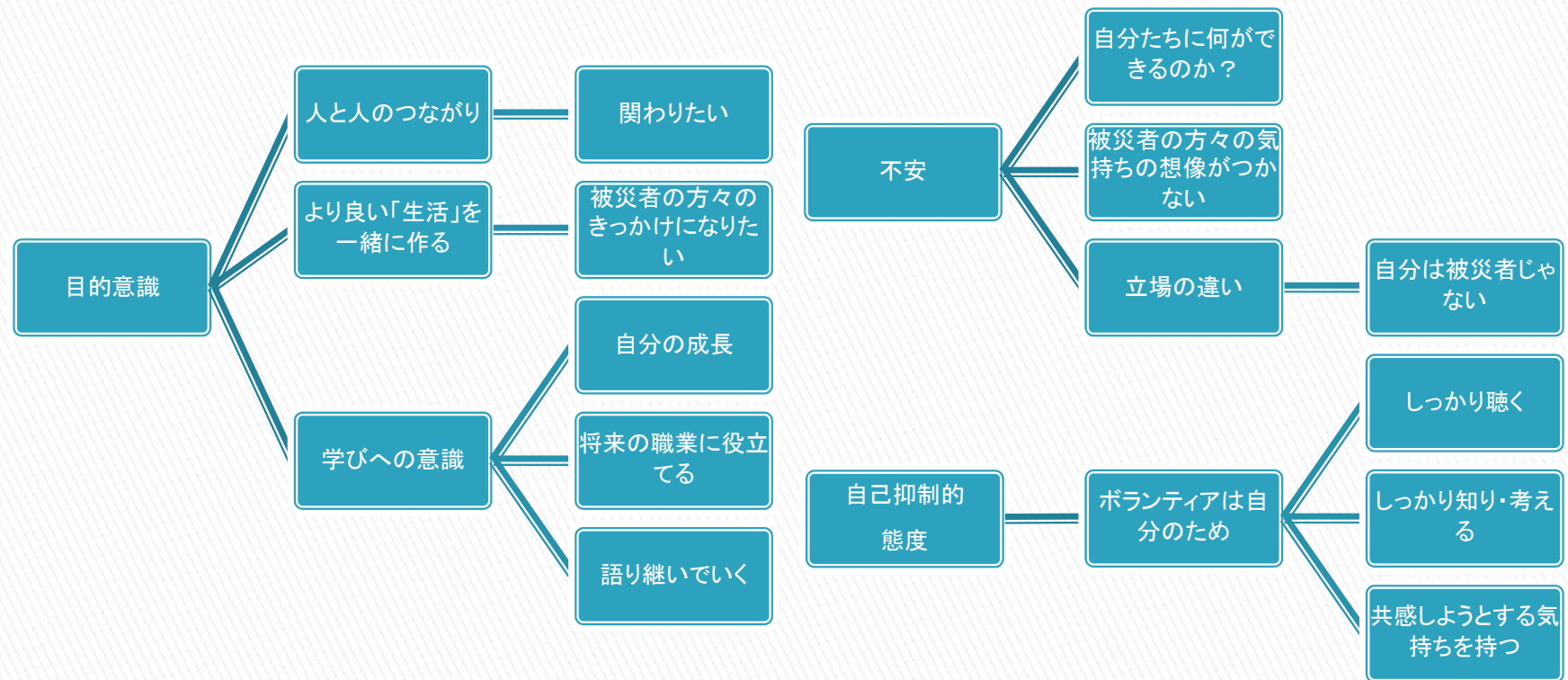
- ① 個人の探究
- ② 個人の形成と発展
- ③ 他者との関係性・葛藤・双方向性
- ④ 「その場」の探究を通じた創造的な変容とその普及・拡散



8. 学生たちの2011年度活動概要

- ① 現地における活動(2011年秋および2012年春 計2回 述べ9日間)
- ② 募金活動(2011.3~4及び学祭期間)を学内および旭川空港, 市内飲食店で実施し, 283,451円を集めて日本赤十字北海道支部に全額寄付
- ③ 石巻焼きそばの販売と, 被災地の情報提供(学園祭)
- ④ 事前学習会(10回)
- ⑤ 活動準備: 方言クイズ, 出身地(旭川, 札幌, 釧路, 室蘭, 神奈川紹介のパワーポイントづくり
- ⑥ 事後学習及び発表会
 - ▶ 学内ゼミ活動発表会(2012年2月22日)
 - ▶ 旭川ウェルビーイングコンソーシアム(AWBC)発表会(2012年3月10日)
 - ▶ 上川町立上川中学校総合学習支援(2012年4月18日)
 - ▶ 「平和を守り, 暮らしに憲法を生かす会」における講演(2012年6月27日 ※予定)

9. 被災地入りする前の学生たちの思い



肯定的な感情:期待

否定的な感情:不安→自己抑制的 態度

10. 仮設住宅における活動について

(課題)

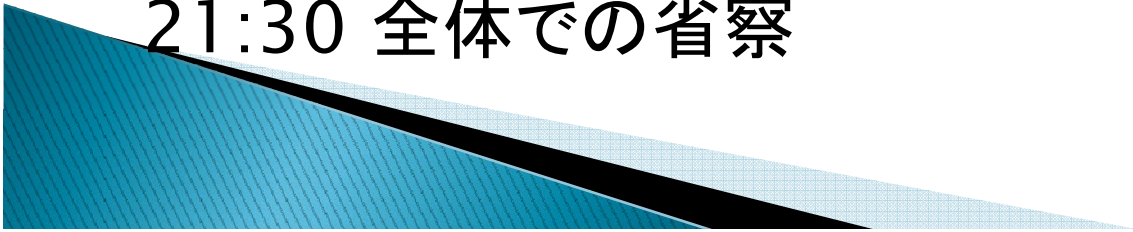
住民同士のコミュニケーションを創る。行政が入らなくても自活していくことができるようにすることが目標。今回のサロン活動はこのための「仕掛け」として位置づけられる。

※安全だが「難易度の高い」仮設住宅に割り振られた。

(事前ミーティングにおける注意事項)

- ▶ 活動時間は10:00-15:00。ただし利用者の雰囲気等で時間延長も可。その場合は必ず連絡をすること。
- ▶ ノックをしての声かけは控え、外で話をしている方々への声かけが望ましい
- ▶ ゴミは自分たちで持ち帰る。ただし利用者のゴミは市で処分する。
- ▶ 市の広報紙の配布
- ▶ 日付が過ぎたビラなどを、掲示板等からはがす。

11. ある日の活動内容

- 9:00 A仮設住宅到着。談話室内活動準備
 - 10:00 生活相談員に同行し、声かけ
 - 10:30 B仮設住宅で生活相談員に同行し、声かけ
 - 11:00 A仮設住宅内談話室で待機
 - 12:30 昼食
 - 13:00 B仮設住宅で声掛け
 - 13:30 住民(2名, 女性, 65歳以上)来訪
 - 14:30 掃除・反省
 - 15:00 談話室から退出
 - 15:30 宮古市社会福祉協議会で活動報告
 - 21:30 全体での省察
- 

10. ある日の活動内容②

9:40 A仮設到着 談話室内活動準備

10:20 B仮設住宅の方(女性, 65歳以上)を迎えに行く

10:30 談話室でサロン活動(11:45帰宅)

12:00 編み物教室(東京から講師が来訪)及び 他のボランティア団体が物資を届けに来る(東京都江戸川区より)

12:30 A仮設住民の方(女性, 65歳以上)が談話室に来る。

14:00 A仮設住宅の方4名(女性, 10代3名, 60代1名)が談話室に来る。

15:00 編み物教室終了

15:30 A仮設住宅の方(女性, 10代)が談話室に来る。

16:20 談話室利用者全員退室

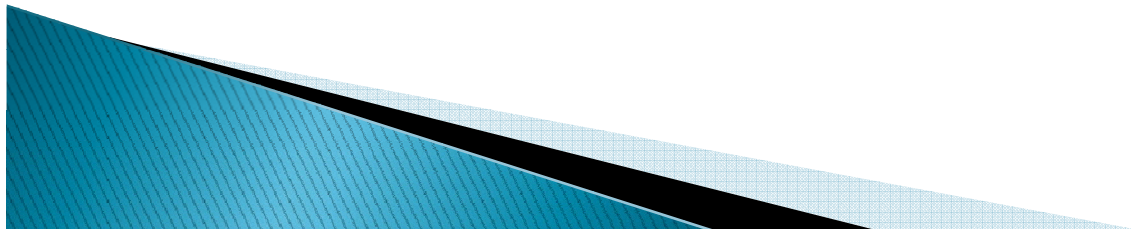
16:30 談話室閉館

17:00 宮古市社会福祉協議会で報告

※ 大槌町へこの後, 向かったために省察は帰旭した2日後に行った。

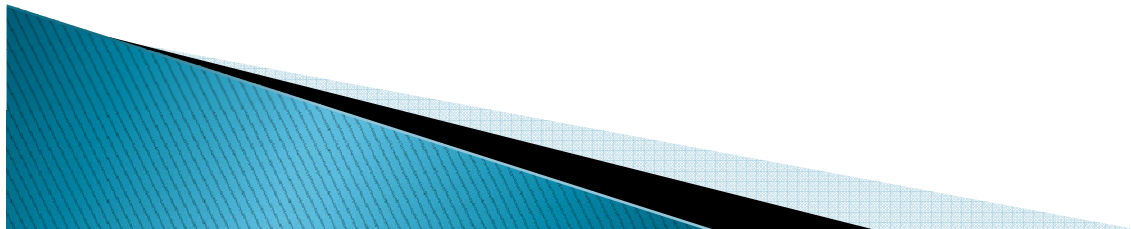
11. 学生たちの学び

- ① 自己の探究
- ② 自己有能感の獲得
- ③ 自己形成と発展
- ④ 他者に向かい合う
- ⑤ 探究を通じた「その場」への働きかけの創出
- ⑥ 自分たちの活動の発展
- ⑦ 日常生活や将来の職業へのつながり



12. 学生達の学び: 自己探求

- ▶ 自己の振り返り:「自分たちが何かをしよう」から一人ひとりの被災者が求めているものは何かという目線へ「自分たちのやった結果を求めてしまっていた」
- ▶ 無力感: 支援者－被支援者関係の組み替え
「(二人の女性が来てくださって)こちら側が元気をもらい、勇気づけられました」
「自分は無力。被災者の人の話を聴いて何もできない。無力だとわかったからこそ自分の内面と向かい合うことが出来る」



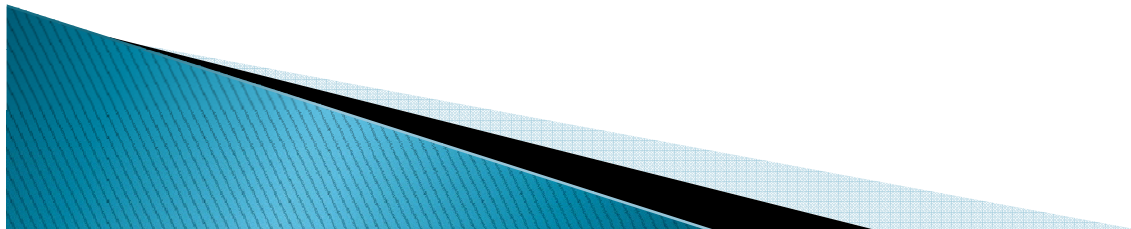
13. 学生たちの学び：自己有能感の獲得

- ▶ 自己達成感：自分たちもやればできる

「何かやろうと今までやった経験がなかった。
事前準備も含めて何か目標に向けて頑張る仲間も出来て個人的にも成長できた」

- ▶ 自分たちの存在意義

「KさんとSさんの関係をつないだということは私たちが（岩手県宮古市に）行った意味」



KさんとSさんの出会い

(2人とも「知っている程度」だった。他の入居者もそれぞれコミュニケーションが取れていない状態だった。)

Kさん: きんまに塩をのつけて運んでいた。

学生: (何気なく) きんまって何ですか？

(Kさんがきんまについて学生に教えてくれる)

学生: Sさんも漁協関係でしたよね。

Kさん: (Sさんに) 名前は何ですか。

Sさん: S(フルネーム)です。

Kさん: S・・・さんて知っている？

(漁業関係の話が深まっていった)

※5か月後の春の活動の際にはKさんとSさんは一緒に将棋やマージャンをされている仲になっていた。

14. 学生達の学び: 自己形成と発展

▶ 失敗からの学び

「自分が情けなかった。(略)(子どもたちに明るく接しようとしたが)『死ね』とか『終わった』とか言ってしまった。そういった発言をなぜしてしまったのか。(子どもたちと)同じ目線に立つことは大事だが、言葉遣いとか安全面などを冷静に見られる自分が必要」(10月)

「今回(春のボランティア)は積極的に話すこともできたし、地雷を踏んでも回避できた。幅が出来た。(略)家族の話が出たとしても、こちら側でエスカレートさせていてはいけない。相手を追い越した時にブレーキをかける必要性。客観的な自分が必要」(3月)

▶ コミュニケーション・スキル: 楽しそうな雰囲気を作る, 相槌, 目を見て話す, 特技(将棋等)を持つ

15. 学生達の学び: 他者に向かい合う①

▶ 他者と関わる怖さ

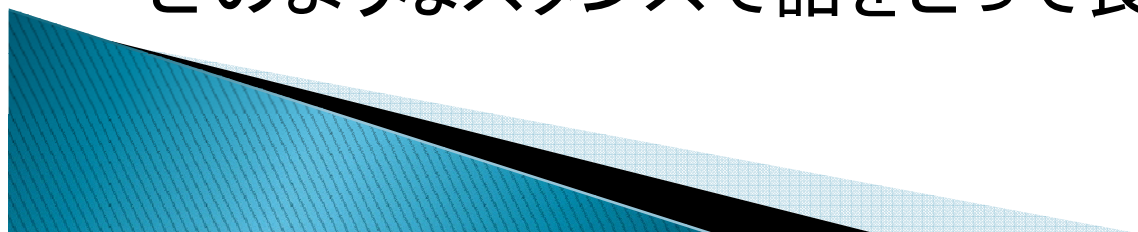
「病院実習に行った時と同じ世代の人たちだったから緊張した。患者さんに嫌われたことを思い出した。ジャッジされることが怖い」

▶ 他者への感謝

自分たちこそ元気づけられている。「たくさんの『ありがとう』を言えた」

▶ 被災者の心の配慮

「(仮設住宅の人たちは)つらそうな話をしない。だからどのようなスタンスで話をとって良いのか分からない」



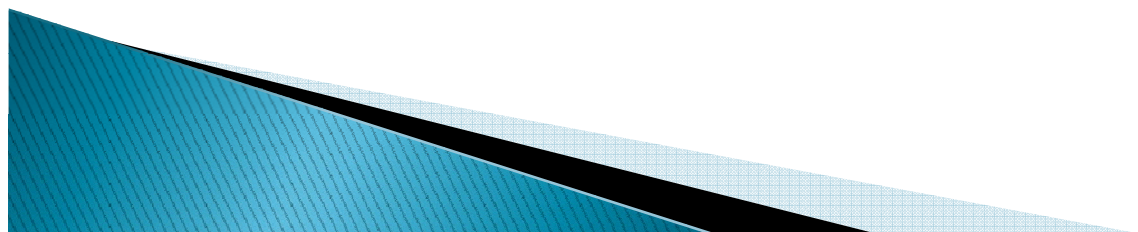
15. 学生達の学び: 他者に向かい合う②

▶ 人の「思い」に触れる

「(ある子どもが携帯の待ち受け画面を見せて)これ, 飼っていたペットなんだよ」

「(ある女性が)私はもう海を見たくはない」

「(ある男性が)『今までTVしか見ていなかったから来てくれて嬉しかった』と言ってくれた」



16. 学生達の学び：探究を通した「その場」への働きかけの創出

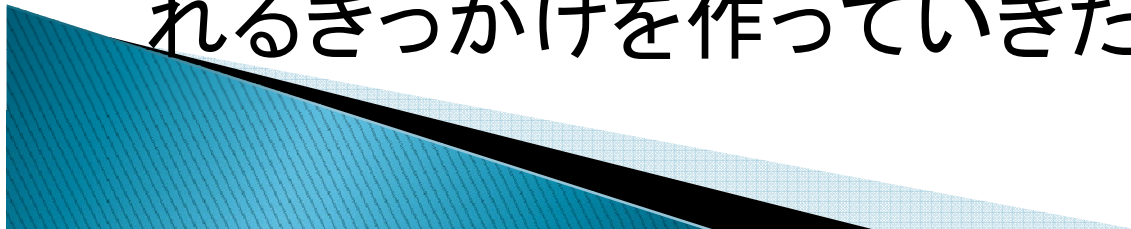
「自分たち発信（掃除，ゴミ拾い，雑草取り）でいくしかない」

「昨日はゼロだったけれど今日は2人。それが重要」

「何かをしに来たというよりは，こういうことを一緒にしていきませんかと言う働きかけ（例 北海道レシピ）が大切」

「関わりたいという気持ちが必要」

「小さなきっかけを生んで、住民同士でつながれるきっかけを作っていきたい」



17. 学生達の学び:活動の発展①

▶ ボランティア活動に対する考えの深化

「『ありがとうございました』と言われるために活動してきたわけではないと思っていた。最終日には『ありがとうございました』と心から言えた。(ボランティアでは)自分が感謝をするために活動をする」

▶ さらなる学びの必要性

「自分の出来る範囲で、自分を拡大していく」

「明確にテーマを持つ。何でも対応できることも大切だけれども、そのうえで『これ』というもの」

▶ 他のボランティア団体との交流の必要性

「他のボランティア活動で私たちと違う活動。違う活動を見ることが私たちも幅が広がる」※同じ学内の別サークルや日本赤十字北海道看護大学の学生達との交流へ

17. 学生たちの学び：活動の発展②

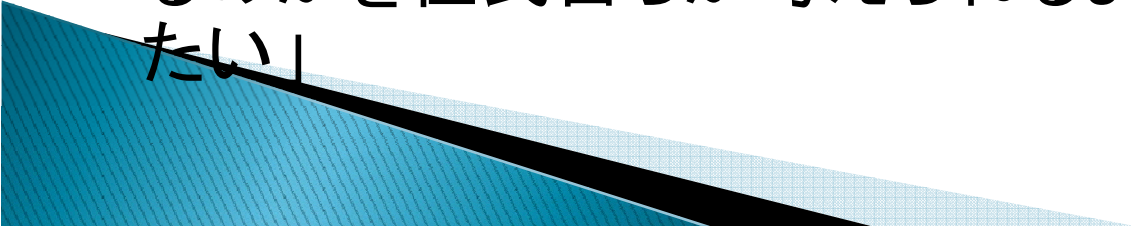
▶ 支援者としての役割

「仮設の人たちの何かしたいという気持ちがある。ボランティアの限界の中で自立した支援を探求したい」

「相手の状況に応じて関わり方をその都度考えながら活動をしていきたいと思った」

「つながりが必要な方は談話室に来られない方々であり、仮設住宅のリーダーを通して住民同士のつながりを作っていけるような関わり方をしていきたい」

「今後どのようにしたら住民主体で集まれる状況を作れるのかを住民自らが考えられるような働きかけをしていきたい」



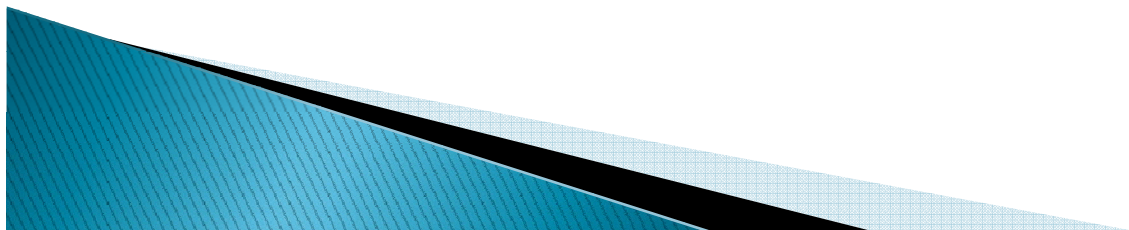
17. 学生たちの学び：活動の発展③

▶ 事前準備の大切さ

「私たちは、宮古市に訪れる前に会話のきっかけ作りとしてクイズやゲームを用意しました。しかし、実際に活動を行うとききっかけを作ってくれたのは触れ合った宮古市の方々でした。これは事前準備をしたからこそ気づけた点でした。」

▶ 継続性の重要性

「ゴールは今回(のボランティア活動)ではない(＝継続性が大切)」



18. 学生達の学び: 社会に対する批判的思考

- ▶ 被災者の視点に立つ

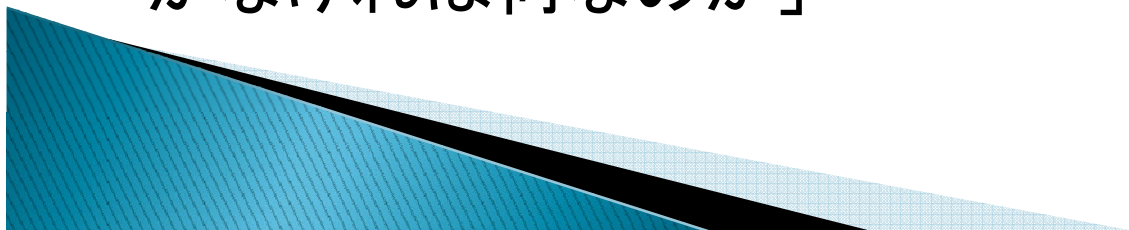
「何人家族でも間取りが同じ仮設というのはどうか？ストレスがたまってくるのではないか」

- ▶ 震災報道への批判

「(被災者報道は)もっと個人に焦点を当てて報道することが大切」

- ▶ 継続的な関わりへの決意

「(社会が忘れ去っていくことを念頭に)継続できることが重要。Hさんは『来年も来てください』と言っていた。行かなければ何なのか」



19. 学生達の学び：日常生活や将来の職業へのつながり

自分の「ルート」の気づきにつながる可能性

▶ リテラシーの大切さへの気づき

「(宮古市田老地区と大槌町を比較して一方的に決めつけていたことを反省して)一部の情報だけで知った気になっていた」

▶ 将来の職業人としての意識

「仮設住宅に住んでいることで、ADLの低下が懸念されるのではないかと感じた。何か楽しみながら体を動かしたり、他者と関わったりする場所や機会を創出していく必要性を感じた。」

「もし私が看護師ならば現場を見ることを大切にして、一人ひとりをきちんと見ていきたい」。

利用者情報をプライバシーに気を付けながら提示して人間関係作りにつなげる。「『Kさんも将棋できるって言ってましたよ』とSさんに声かけると、Sさんが、談話室から自宅に帰るとき、Kさんのことを気にしているようであった」

▶ 東北への思い。

「何らかの形で東北を盛り上げる役割を担いたい」

20. まとめ:学生たちの学び

利用者が
ほとんど
いない現
実

自分に向
かい合う
無力感

能動的な
働きかけ

仮設住宅
の方々と
の人間関
係が生成

充実感
達成感
自己有能
感

自分たち
の活動の
発展へ
社会への
批判

21. まとめ: より良い学生たちの学びのために

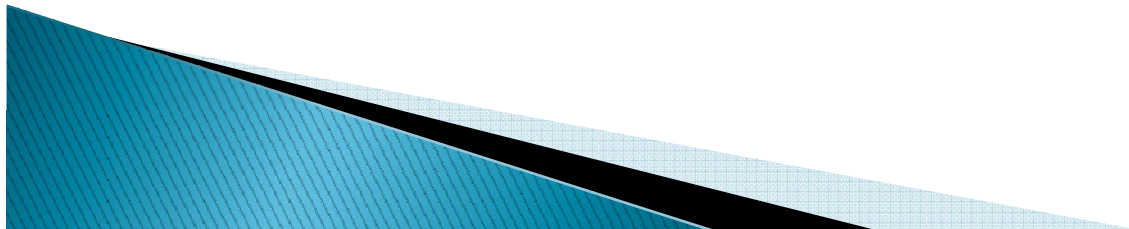
- ▶ 省察促進のために使用したALACTモデルに照らしてみれば, 学生たちの意識は「行為のふり返し」から「行為の選択肢の拡大」に飛ぶ。「本質的な諸相」の認識に至らない。
- ▶ 「本質的な諸相」の意識付けのために行為の振り返りの段階で自分と相手の欲求・行為・考え・感情について想像させる働きかけが必要であった。

どのような状況か？		
	self	others
want	1. あなたは何をしたかったのか？	5. 相手は何をしたかったのか？
do	2. あなたは何をしたのか？	6. 相手は何をしたのか？
think	3. あなたは何を考えていたのか？	7. 相手は何を考えていたのか？
feel	4. あなたは何を感じていたのか？	8. 相手は何を感じていたのか？

第2局面における具体化を促す問い
(Korthagen, 2008, p.121)

22. 地域そだて(岩崎, 高野, 2010, p.174)

- ▶ 制度や枠組みづくりではなく, 場に働きかけることに焦点を合わせる。
- ▶ プロジェクトや事業ではなく, 一人ひとりの(小さな)活動を重視する。
- ▶ 専門家は排除しないが, より大切な担い手として素人(年齢, 性別, 国籍等を問わない)に期待し, 可能な限り多様で多数な人々の関わりを重要視する。
- ▶ 短期的な成果ではなく, いつまでも関わり続ける継続性を大切にする。



参考文献リスト

- ▶ 岩崎正弥, 高野孝子.(2010).『場の教育「土地に根ざす学び」の水源』.農文協
- ▶ Korthagen, F.A.J., Kessels, J., Koster, B., Lagerwerf, B. & Wubbels, T. (2008). *Linking practice and theory: the pedagogy of realistic teacher education*. NY: Routledge.
- ▶ コルトハーヘン著, 武田信子監訳. (2010).『教師教育学:理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ』. 学文社
- ▶ National Service- Learning Clearinghouse. (2005). *Reflection in higher education service learning*. Retrieved from May 30 2012. from http://www.servicelearning.org/instant_info/fact_sheets/he_facts/he_reflection
- ▶ National Service- Learning Clearinghouse. (n.d.). *Benefits of community-based service-learning*. Retrieved from May 30 2012. from http://www.servicelearning.org/instant_info/fact_sheets/cb_facts/benefits-community-based-service-learning
- ▶ 佐伯胖.(1995).『「わかる」ということの意味』.岩波書店
- ▶ 佐伯胖.(2003a).『「学び」を問い続けて』.小学館
- ▶ 佐伯胖.(2003b).「文化的実践への参加としての学習」.佐伯胖, 藤田英典, 佐藤学.『学びへの誘い』東京大学出版会.pp.1-48.
- ▶ 佐藤郡衛, 横田雅弘, 吉谷武志.(2006).「異文化間教育における実践性」異文化間教育学会編.『異文化間教育』23号. アカデミア出版会. pp.20-36